

1. 背景とねらい

夏みょうがは、岩手県内における栽培面積はそれほど広がらないが、地域特産物としての役割を担っている。現在概ね50ha栽培されているが、そのうち県北部収穫面積は13ha程度で、収穫期もお盆過ぎの8月中旬以降と遅く、価格の安い時期に出荷販売されている。

そこで高価格が期待される8月上旬の早期出荷をねらいとして、種市町の拠点試験地において萌芽前の保温資材被覆を試みたところ、株の生育や出蕾の促進に効果が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術内容

(1) 融雪後にみょうが畦をビニールトンネルで被覆することにより、収穫は6～7日早まり、トンネル内に不織布ベタ掛け被覆を併用することで、さらに3日位早まる。

(2) 県北部における8月末までの収量はビニールトンネル処理により25～30%程度増収し75kg/a位の収穫が得られ、さらにトンネル・ベタ掛け併用で85kg/a位の収量となる。

また、8月前半の収穫量は慣行栽培では全体の20%程度であるが、トンネル区、トンネル・ベタ掛け併用区では45%程度となるため、これらの処理によって8月前半出荷量は慣行の2倍以上となる。

(3) 被覆資材の除去は、5月中下旬の平均気温15℃以上になってからとするが、遅過ぎると葉に日焼けを生じるので注意する。

(4) みょうがの販売単価は8月後半は500～220円/kg(2kg・1ℓ出荷)と安い、8月前半の販売単価は1200～600円/kgと高いので、県北部でも増収分とあわせて保温資材費等の経費を考慮しても、大幅な所得の向上が期待できる。

(62年実績では慣行区に比べトンネル区は11,400円/a、トンネル・ベタ掛け併用区は16,600円/aの所得増となった。)

(5) 適応地帯 県下全域

3. 指導上の留意事項

(1) 被覆開始は遅くならないようにし、4月始めには終えること。

(2) トンネルの穴あけ開始時期は、発芽時期を目安とし、気温上昇と共に両肩面に直径5cm、1m間隔位から順次増やし、㎡当たり約20ヶ位にする。
(開孔率 3%)

- (3) 肥大を良くし、品質向上を図るため、ベタ掛け処理前に落葉、稲わら、古茎葉の施用や、間引きなど肥培管理は充分に行う。
- (4) この方式による品質の低下は認められない。
- (5) 本試験は、種市町拠点試験地の試験結果より得られたものであるが、全県下に適應できると考える。

4. 試験成績の概要

表一 1 62年における収量調査表

(月・日、kg/a)

区	出番 時期	収 量				
		～8.10	～8.13	～8.22	～8.29	計
1.慣 行	8月 5日	5.0	6.0	16.0	28.0	55.0
2.ビニールトンネル	7月29日	21.0	13.0	20.0	19.0	73.0
3.ビニールトンネル 不織布マルチ	7月27日	25.0	15.0	23.0	22.0	85.0

表一 2 販売調査

(円/a、62年八戸市場)

区	月・日	8.10	8.13	8.22	8.29	計
	包装単位	100gパック	100gパック	2kg ハウ	2kg ハウ	
	kg・円	700	700	426.5	290.2	
1.慣 行		3,500	4,200	6,824	8,125	22,649
2.ビニールトンネル		14,700	9,100	8,530	5,513	37,843
3.ビニールトンネル 不織布マルチ		17,500	10,500	9,810	6,384	44,194

表一 3 保温による経済試算

(円/a)

	販 売 額	保温資材費	差
1 慣 行	22,649	—	22,649
2 ビニールトンネル	37,873	3,838	34,035
3 ビニールトンネル 不織布マルチ	44,194	4,937	39,257